

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

6 JUNE 2002

CONTENTS

インタビュー満載!
MCO定期演奏会大特集 1
最近の公演から 4
ネタタマ! 5
インフォメーション 6



川崎雅夫



水野信行



宮本文昭

ひさびさに放つ「指揮者なしのアンサンブル」の魅力

6月8日(土)・9日(日)水戸室内管弦楽団第49回定期演奏会

われらがマエストロ小澤征爾以降、ジャン・フランソワ・バイヤール(指揮)、ライナー・クスマウル(ゲスト・コンサートマスター)、トレヴァー・ピノック(指揮)と、ここ最近、指揮者やアンサンブルのリーダーを招いての演奏会が続いた水戸室内管弦楽団(MCO)。6月前半の第49回定期演奏会は、MCOの演奏活動の主軸のひとつであるメンバーのみの演奏会で、「指揮者なしのアンサンブル」の魅力をはびびさに聴かせてくれることでしょう。

プログラムの前半は、MCOが誇る実力派奏者がソロをつとめる協奏曲を2曲。まず、ホフマイスター ヴィオラ協奏曲 二長調でソロをつとめるのは、活発な演奏活動の傍らジュリアード音楽院などで熱心に後進の指導にあたっている川崎雅夫さん(漆原朝子さんや竹澤恭子さんなどそうそうたる顔ぶれが川崎さん門下から巣立っています)。一方、R. シュトラウス ホルン協奏曲 第1番 変ホ長調でソロを演奏するのは、ドイツの名門オーケストラ、バンベルク交響楽団で長い間首席奏者の大役を務めてきた水野信行さん。ともに海外在住のメンバーということで、vivoでは国際電話インタビューを敢行。お2人に初めてMCOでソロをつとめるにあたっての意気込みや曲の聴きどころなどを存分に語っていただきました。

プログラム後半は、ブラームス 弦楽五重奏曲 第2番 ト長調。57歳のブラームスの滋味溢れる楽想と老練な書法が魅力の作品です。気の置け

ない仲間に向かって作曲家が静かに語りかけるようなオリジナルの弦楽五重奏も魅力的ですが、シンフォニックな広がりや厚みの映える弦楽合奏版は、より親しみやすい表情で私たちを迎えてくれます。ヴァイオリンとヴィオラが奏でるさざなみに乗ってチェロが飛翔するように歌う第1楽章の冒頭、物悲しい哀愁を帯びた旋律をヴィオラがとうとうと歌う第2楽章など、聴きどころたっぷりの名曲です。

.....
「ホフマイスターの協奏曲、ぜひ楽しんで聴いてください」

川崎雅夫インタビュー

.....
川崎さんはときにヴァイオリニスト、ときにヴァイオリストとして、長年さまざまな室内楽やアンサンブルで活躍されてきました。ヴィオラは他の弦楽器に比べてどんなところに魅力があるとお考えですか?

川崎:オーケストラや室内楽などのアンサンブルで、ヴィオラはヴァイオリンとチェロにはさまれて、内声部を担当しています。一般には地味な楽器という印象があるでしょうね。ただ、音楽の骨格を支えたり、和声を決定的という意味で大変重要な役割を担っている楽器でもあります。それが表に見えづらいので、「黒子役」みたいなものでしょうか(笑)。

輝かしいソプラノのようなヴァイオリン、部厚い

響きのチェロに比して、ヴィオラは人間の話し声の音域に近い、どちらかというと渋い音色が特徴ですね。その人間的な深みのある響きは、ヴィオラにしか出せない種類のものだと思います。

今回そうしたヴィオラの響きが川崎さんのソロで存分に楽しめるわけですが、ホフマイスターの協奏曲についてご紹介いただけますか?

川崎:ホフマイスター(1754~1812)はウィーン古典派時代にウィーンで活躍した作曲家ですが、誰に学んで、どういう経歴で作曲家になったかなどについての情報はあまり知られていません。ただ確実にいえるのは、ホフマイスターは出版で業績をあげた人ということですね。モーツァルトやベートーヴェンの室内楽作品のいくつかが彼の出版で出ています。作曲以外でも重要な仕事をした人なんです。

それで今回なぜホフマイスターにしたかということ、もちろん他の曲目との兼ね合いもあるけれど、僕の住んでいるアメリカでは、この曲は「練習用」みたいな感じで、モーツァルトのヴァイオリン協奏曲なんかに比べると一段低い扱いをされがちなんです。だからあんまり弾くチャンスがないわけ。でも、本当に素晴らしい曲なのでぜひ聴いてもらいたい。心地良いウィーン的な雰囲気を満たされた第1楽章、ベル・カントで美しく歌うような第2楽章、洗練として快活な第3楽章と、各楽章の性格分けが見事だし、ヴィオラ・ソロも安心感のあるゆ

ったりとした響きとともに、普段はヴィオラでは聴かないような高い音域も聴くことが出来ます。水戸だったら、この曲の良さを素直に楽しんでくれる方が多いんじゃないかな、と期待しています。

この曲はMCOとしては初のレパートリーになるわけですが、ソロ以外は、弦楽合奏、オーボエ2、ホルン2という編成も室内オーケストラ向きですね。

川崎:僕はオルフェウス室内管弦楽団で長い間弾いてきて、それでMCOでも初めの頃から弾かせていただいているわけですが、誰が何をやっているのか、すみずみまで聴こえるようなくらのアンサンブルというのが好きですね。MCOはもう結成から12年が過ぎて、メンバーの皆の気心も知れてきて、カラーがはっきりしてきましたよね。だから可能性を広げる方向も見えてきたし、様々なことにチャレンジしていける状況だと思います。

一方でMCOは若い血もどんどん受け入れようとしています。ご子息の洋介さんも入団されましたが。

川崎:そうですね(笑)。アメリカでは教える仕事がとても多いのですが、やっぱり若い人たちからいい刺激をもらうことも多いですね。MCOでは若い優秀なプレーヤーがエキストラで参加し、そこで認められると正メンバーになれるという流れがあるので、とてもいいことだと思いますね。

最後にお客様に向けてメッセージをお願いします。

川崎:両親は茨城県出身ですが、自身は東京生まれ、東京育ちの僕としては、最初の頃は水戸に来て演奏しているだけで、特に地域の人たちの交流というのはなかったと思うんです。歩いていても、話しかけられることはなかったです。でもここ数年、お客様や地域の方々との距離が縮まってきたように感じます。話しかけて下さる方も多くなりましたし、演奏会の拍手からも親近感を感じますね。最近は、僕も水戸に来るとホームに帰って来た感じがするかな。地域の方々のサポートは、とても

大切なものだと思うので、これからもこのいい関係を発展させていきたいですね。

どうもありがとうございました。

.....
「R.シュトラウスならではのホルンの書法をぜひご堪能ください」
水野信行インタビュー
.....

オーケストラの中でホルンが様々な活躍するのは私たちもよく知っていますが、ソロ楽器としてのホルンの魅力はどこにあるのでしょうか？

水野:まず申し上げたいのは、ピアノや弦楽器、木管楽器など他の楽器と比べて、ホルンは機能的にあまり器用に演奏できる楽器ではない、ということですね。それでは何が武器になっているかというと、それは「音色」と「音楽性」だと思います。オーケストラの中では、ホルンのやわらかい音色というのが古い時代からよく使われていて、弦楽合奏の中で吹いたり、木管楽器がいろいろと活躍している場面で吹いたり、脇役に回っていわゆる「つなぎ」のような役割をしていることがあります。ちょうどモーツァルトのディヴェルティメントなどを思い出していただければ分かると思うのですが、今回はソロなので、それとは違った面をお聴かせできると思いますし、ホルンでなければ出せない音色の美しさを存分に楽しんでもらえればと思っています。

指揮者なしということで、ソロで吹く以外にいろいろと気を使われることもあると思いますが？

水野:いや、むしろ指揮者がいるより楽かもしれないと予想しているんです。つまり、指揮者がいて、オーケストラが指揮者に頼りきりの場合、指揮者がダメだと全部ダメになってしまうわけです。ところが、MCOの場合は、他のメンバー、他のパートがどういう動きをしているかよく聴き合っていて、皆がほんのちょっとした音楽の間や呼吸を感じながら演奏しているので、ソロに回ってもアンサンブルしやすいような気がするのです。まさに巨大な室内楽というような感じでしょうか。

ンブルしやすいような気がするのです。まさに巨大な室内楽というような感じでしょうか。

R.シュトラウスは編成も大きいだけに、とても楽しみです。曲についてご紹介いただけますか？

水野:これはリヒャルトが18歳の頃に書いた曲で、古典的な作風といってもいいと思います。ただ、あるモチーフが全3楽章を通じて循環するなど構成の面でも行き届いていますし、シュトラウスらしいオーケストラの書法もすでに出ています。

何と言っても素晴らしいのはホルン・ソロの書法です。実はリヒャルトの父フランツは、ミュンヘンの宮廷オーケストラのソロ・ホルン奏者だったんですね。名指揮者ハンス・フォン・ビューローをして「ホルンのヨアヒム」と呼ばしめたほどの腕前の持ち主だったそうです。そういう父親を持ったりリヒャルトは、小さい頃からホルンに親しんでいたわけで、ホルンの長所を知り尽くしていたんですね。もう、曲の冒頭からホルンでなければ表現できない音楽になっています。僕も何度演奏しても難しいと感じますし、それだけ味わい深い音楽になっているとも思います。

MCOでソロするにあたっての意気込みをお聞かせください。

水野:MCOで演奏するようになってもう12年になりますが、本当に心が知れた仲間たちとも言えます。メンバーの1人1人が本当に素晴らしい音楽家の皆さんですから、仲間とは言っても毎回緊張しています。今回はソロということもあって、半年も前から緊張しているんです。(笑)

水戸は、音楽以外の部分でも、美味しいものがあったり、観光名所があったり、水戸に来るのは毎回楽しみで、もう僕にとって故郷の一つといってもいいくらいですね。これからも皆様により楽しんでいただけるようがんばっていきたくて考えています。

どうもありがとうございました。

未来に向けて放つ3本の矢 50回の記念定期公演を迎えて

6月26日(水)・27日(木)水戸室内管弦楽団第50回定期演奏会

この回で水戸室内管弦楽団(MCO)の定期演奏会が50回という節目を迎えます。この公演の指揮を務めるのは、もちろんMCO音楽顧問の小澤征爾。そして、プログラムは、MCOがさらなる高みへ挑戦することの意思表示であるがごとく、冒険心に溢れたものとなっています。今回取り上げる3曲はその関連性で捉えるというよりは、自在に飛んでいく3本の矢のように、それぞれが固有の指向をもっていると言えます。しかし、それらは、

尽きることのない「音楽の探究」に向かって放たれた矢であることに違いはありません。音楽の多彩な魅力に溢れたプログラムで、MCOは50回という記念の定期公演に臨みます。まずは、未定だった1曲、平義久: 彩雲 のご紹介から。

【MCO委嘱作・平義久: 彩雲】

平義久(1937-)の名は、日本よりむしろフランスでより広く知られています。武満徹、一柳慧な

どに続く年代の作曲家であり、パリの国立高等音楽院へ留学、ジョリヴェ、メシアン、デュティユー等の大家達のもとで研鑽を積んで以来、現在に至るまでパリを中心に35年以上にわたって活躍をしています。平義久は、自らの音楽の在りかたについて、次のように語っています。「音楽とは私にとっては、私を存在させる祈りの、本能的で内的な歌である。私にとって音楽をつくることは、私のとらえた音の一つひとつが注意深く生きるのに耳を

傾けることである。音楽は私にとって生きた具体的なことばでなければならぬであろう。」

小澤征爾とMCOは、平義久の新作をひっさげ、「同世代」の音楽と向き合い、そして「生きる」意味を模索します。(平氏自身のコメントを後掲していますのでご覧ください。)

【モーツァルト:オーボエ協奏曲】

震えるほど美しい音楽に触れたときの幸福感。

音楽のもっとも大きな魅力は、このような言葉で語れるのかもしれない。そして、この洗練の美を目指して、昔も今も音楽家たちは、その実現のために生涯を捧げます。

この音楽の幸福感を存分に味わえうのが、MCOメンバー宮本文昭がソリストとして出演する、モーツァルトのオーボエ協奏曲です。モーツァルトという天賦の才をもった作曲家が、どこまでも華麗で、美しい音楽を追究した協奏曲の世界に、心も体も預けて存分にお楽しみください。(宮本文昭氏のインタビューを後掲しています。)

【ハイドン:交響曲 第60番 うかつ者】

ときには、深遠な哲学よりも、身の回りにこぼれていそうなユーモアに、救われたり、心の糧を与えられたりすることもあるのではないのでしょうか。演奏会の掉尾を飾るハイドンの交響曲第60番は、そうしたユーモアに包まれた作品です。「うかつ者」という副題は、フランスの劇作家J.F.ルニャール(1655-1709)の同名戯曲のハイドンによる付随音楽からこの交響曲が構成されていることに由来します。戯曲も演奏も、とにかく「うかつ」なことばかり! 戯曲の方のフィナーレでは、主人公が、結婚式当日、自分が新郎であることを忘れ、ネクタイを結んでいるときに、ようやく自分が今日結婚することを思い出すという次第です。さて、この交響曲の方のフィナーレでも、演奏家たちのとんでもない「うかつ」な事件が起こります。勿論、「交響曲の父」ハイドンの作品ですから、上っ面だけの笑いにとどまる筈がありません。この作品の狂乱の世界を描く為、ハイドンは実にさまざまな趣向を凝らしているのです。

3方向に放たれた矢が、射当てようとしているものは何なのでしょう? 小澤征爾&MCOが3本の矢をひとつに束ねて、未来に向かって放ちます。

「演奏者と一緒に息をしながら聴いていただきたい」

宮本文昭インタビュー

今回は「モーツァルト:オーボエ協奏曲 八長調」でソリストとしてご出演されるのですが、宮本さんにとってこの作品の演奏はどのようなものとお考えですか?

宮本:モーツァルトという偉大な作曲家が、オーボエのために書いた協奏曲として残されているの

は、これ1曲しかないの、演奏会はもとより、オーディションでもコンクールでも、非常によく演奏されている曲なのです。それだけ多くの演奏が行われてくると、「良い演奏」とか「正しい演奏」というような規範が作られがちになってしまいます。でも僕は、良いとか正しいとかではなく、まさに「音楽」としての演奏を心がけなくてはならないと思っています。どういうことかと言うと、このオーボエ協奏曲を捉えようとするときに、オーボエという特定の楽器のために書かれた協奏曲という枠内で、個別的に考えるのではなく、室内楽も、交響曲も、協奏曲も、オペラなども書いているモーツァルトが、この曲を通して何を表現したかったのか、それを僕は捉えて演奏したいと思うのです。演奏者の持っている、作曲家に対する感覚やイメージネーションを自分なりに表現していくことが大切なのではないでしょうか。たとえば、アーティキュレーションやスタッカートなどはこの様に演奏すべきだなどという聴き方ではなく、僕の捉えているモーツァルトの世界観に触れて、お客さんひとりひとりのイメージネーションの中で遊んでいただきたいと思っています。

宮本さんから見て、小澤征爾さんとはどのような指揮者ですか? また、水戸室内管弦楽団とはどのようなオーケストラですか?

宮本:この前演奏したR.シュトラウスのオーボエ協奏曲(1999年MCO第37回定期)をはじめ、僕はこれまでに何度も小澤さんにコンチェルトやコンチェルトタンテなどで指揮をやってもらっています。小澤さんは、とにかくソリストである僕をめちゃくちゃ立ててくれるんですよ。だから、こちらが目を閉じて吹いていても、こちらが相当の無理をやっても、そこに文句を挟まず、自由にやらせてくれる。そういう意味では、小澤さんは本当に甘えがいがありますね(笑)。実は、本当に技術があり優れた指揮者でないと、これはできないことなんです。技術がない指揮者だと、ソリストに注文をしてくたりするのです。逆に、優れた指揮者であっても自分の色を出そうとして、ソリストに影響を与えようとする人が多いです。勿論、オーケストラだって、下手なオケでは、そこまで柔軟に対応できるものではない。腕は確かハイ・レベルな演奏家たちの集まりであるMCOだからこそ、できることなのだと思います。前回のシュトラウスのときは、小澤さんから「あなたの伴奏をやっていると、うなぎかどじょうを捕まえるようだ」と言われました(笑)。それでも小澤さんとMCOは、何ひとつ僕に注文をつけることなく、合わせてくれましたね。

最後に聴衆へのメッセージをお願いします。

宮本:演奏者と一緒に息をしながら聴いていただきたいと思っています。こちらが苦しい息づかいのときは、同じように息をしているとお客さんも苦しい思いをされるかもしれませんが(笑)。僕たちの演奏する管楽器の場合は、息づかいがはっきりと見えるので、息を合わせることはやり易いと思いま

す。今行われている小澤塾でも参加者たちに向けてこの話題が出ていますが、息を合わせるという同時体験をすること



MCO第37回定期演奏会より

で、一緒に音楽の道行きを旅することができるのです。僕はオーボエを吹きますが、お客さんは自分が歌ったり、楽器を吹くようなつもりで聴いてもらいたいと思います。僕もコンサートに行って、一緒に息をしてみると、演奏家がどうい音楽を作ろうとしているのかが良くわかるんですよ。演奏会が終るとへとへとになっちゃいますけれどね(笑)。

きっと、若い人たちは音楽を体験したいから、ロックやポピュラー・ミュージックを聴きに行くのだと思います。ところが、クラシックは、日本に入ってきた明治以来、どこか彼岸にあるような、静物画を眺めるような、固定されたものであると誤解されてきているような気がします。クラシックを聴いて、体を動かしてくださいとは言いませんが(笑)。ぜひ同時体験をしてください。ドイツではいい演奏ができたとき音楽家たちは「生きていて体験する(erleben)」という表現をします。演奏会では、せっかくライブでその場に居合わせるのですから、音楽をまさに体験していただきたいと思います。そして、そこから演奏者の生き様を感じとっていただきたいのです。

どうもありがとうございました。

《中村》

彩雲の作曲の動機

以前から小口達夫氏(水戸室内管弦楽団総楽団長)よりいただいたCDで、このオーケストラの演奏は知っていました。いつか作曲の機会があればとの願いは持っていました。そして去年(2001年)3月のパリ公演で実際の演奏に接し、このオーケストラの為に作曲したい希望がますます強くなりました。演奏会後のパーティで小澤征爾氏、小口氏との話し合いで委嘱が決定したことは、私の無上の喜びでした。数日後、小口氏の日本からの電話で吉田秀和先生(水戸芸術館館長)がこの委嘱の話に喜んで下さったというお話を伺い、心を強く引き締める気持ちになりました。その折、「どういう作品になるか」との問いに「やはり色彩だなぁ。色彩的な音の群れ、ない音の醸し出す色彩」と考えました。これはこの作品の内容を最も端的に語っているといえるでしょう。「響の余韻、色彩、祈り」私の作曲上での信条です。

平 義久

最近の公演から

APRIL



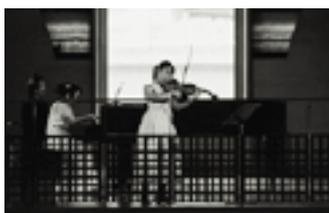
1



2



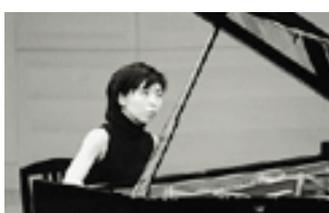
3



4



5



6



7



8

ミト・デラルコ東京公演 & 第4回演奏会

(4月11、14日)

「マドリッドの午後 ポッケリーニの風」と題し、古典派の“知られざる巨匠”ポッケリーニの音楽にスポットを当てた今回のミト・デラルコ演奏会。弦楽四重奏2曲のほか、ゲストに福田進一氏を迎えて、2曲のギター五重奏曲を演奏しました。オリジナル楽器を用いる4人の奏者に対抗(?)して福田氏が持ってきたのは1840年頃に製作されたラコートの名器。驚くほどよく通り、かつまるやかなその音色は4つの擦弦楽器とこの上なくみごとにブレンドし、刻々と色合いを変えてゆくポッケリーニの響きの魔法をホールに立ちのぼせました。ファンダンゴの終楽章では、チェロの鈴木氏がポケットより取りいだしましたるカスタンネットを演奏! アンコールは愉快的なマドリッド夜警の行進。そして福田氏が独奏でソルのメヌエットを奏でると、そのままアツカで全員による、いわゆる有名な“ポッケリーニのメヌエット”(弦楽五重奏曲ホ長調の第3楽章、今回はギター五重奏用にアレンジ)にふわりと移行。客席は大いに沸きました。

4月11日に行われた紀尾井ホールの演奏会はアリオン音楽財団主催による「アリオン・アフタヌーン・コンサート」のシリーズ第1回。プログラムは水戸とちよっと違って、変ホ長調の弦楽四重奏曲をカットし、代わりに前述「ポッケリーニのメヌエット」。鈴木氏、福田氏によるトークも入り、紀尾井の午後はポッケリーニ色に染まりました。この演奏会の模様は6月にANAの機内で放送される予定。もうひとつ今後のミト・デラルコについて重要なニュースがあるのですが、Petite情報およびインフォメーション欄をご覧ください。《矢沢》緊密なのに暖かく、ギターを加えて一層典雅さを増し、心癒され、リフレッシュされました。ポッケリーニがこんなに興味深い作曲家だったとは、音楽の散歩道ではからずも発見した楽しい曲と演奏でした。(Y.K.さん:ひたちなか市) 鈴木さあーん、こっちはしっかり緩んでまーす!(プログラム・エッセイを受けて)無記名の方:水戸市) 曲も最高、演奏者の人柄が良く出て、とつても良かった。キャラクターに万歳(K.N.さん:水戸市) 逆説的ですけど“ポッケリーニだって構造的に聴けるじゃん”と感じました(鈴木秀美さんは苦笑されるでしょうか?) 普段イタリアの団体のポッケリーニ(録音)を聴いているから錯覚でそう感じただけでしょうか? もちろん、楽しく聴きましたよ。ありがとうございました。(M.S.さん:東茨城郡) 知られざる曲、知っていてなかなか実演に接しえない曲を演奏してくれるMDAには深謝。(A.E.さん:高萩市)*「ネッタマネット」にも好評意見が! ご覧ください。

パイプオルガン・ブロムナード・コンサート

『ヴァリエーションズ』(4月20日)

週末にエントランスホールで開催している「パイプオルガン・ブロムナード・コンサート」の新シリーズ『ヴァリエーションズ』がスタートした。『ヴァリエーションズ』は、エントランスホールで、パイプオルガン以外の楽器や歌などの演奏をお楽しみいただく入場無料の公演である。記念すべき第1回は、昨年の「茨城の名手・名歌手たち 第12回」にも出演している川又明日香によるヴァイオリンの演奏会。川又は14歳という若き演奏家。エントランスホールに差し込む柔らかい陽光の中、ほおを紅潮させ一途にヴァイオリンと向き合う川又の演奏は、私たちに音楽を聴く喜びばかりでなく、爽やかな風をもたらしてくれたのではないだろうか。ピアノ伴奏は、川又同様、上記「名手」の第10回公演(99年)にソロ・ピアニストとして出演した生井澤紀江。2人の共演は今回が初めてであったのだが、本シリーズは、彼らのような実力のある演奏家同士の出会いの場としても機能していきたいと考えている。

(『ヴァリエーションズ』の第2回は、7月27日に開催予定。どうぞご期待ください。)《中村》

「茨城の名手・名歌手たち 第13回」出演者オーディション(4月28日)

毎年開催している、茨城県出身の音楽家を紹介する企画「茨城の名手・名歌手たち」が、合格者のさらなる精鋭化を図るため、今年から部門ごとに隔年の開催となりました。今年、鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器部門。対象となる部門が絞られたにもかかわらず、各部門への応募は前回を上回る傾向をみせ、10歳から51歳までの幅広い年齢層の方々が参加されました。エレクトーンやパイプオルガン、和太鼓等、3つの部門でありながら様々な楽器での参加があり、ホールに来場された熱心なお客様を楽しませていました。熱気溢れる演奏の中、選ばれた8名の合格者が9月の演奏会に出演します。《関根》

「茨城の名手・名歌手たち 第13回」演奏会

9月29日[日] 18:00開演

司会:間宮芳生

出演(敬称略、受験番号順):

田名部真理恵、平野梨紗、大塚万記子、篠原有紀子、佐藤晃子、海野智夏(以上、ピアノ) 岡部磨知(ヴァイオリン) 安田有希(箏)

応募総数 43

(鍵盤楽器 34 / 弦楽器 5 / 邦楽器 4)

審査委員

池辺晋一郎、高山三智子、田村拓男、畑中良輔、原田幸一郎、間宮芳生、三善清達

1~3.ミト・デラルコ第4回演奏会 4~5.パイプオルガン・ブロムナード・コンサート『ヴァリエーションズ』
6~8.「茨城の名手・名歌手たち第13回」出演者オーディション



*nettama=ネットワークする猫、タマ。
芸術館のコンサートをサカナに
いるんなどころへnettamaします。

2冊の自伝(後編)

タマ「みなさん、ネットタマネット、ご覧いただけましたか。さっそくのご投稿ありがとうございます。第1号はミト・デラルコ演奏会の感想をお寄せくださった“芝ハ”さんでしたー。パチパチ」

担当Y「先生、先々月僕のことを“TVショッピングじゃないんだから”って言いませんでしたっけ」

タマ「できますればvivoのPDFファイルもお試しいただきたく...表紙の色をはじめ、さりげない細部の違いにつきましては目下前向きに検討中でありまして...」

Y「“こんどは国会答弁かい”って言うていいですか。なんかやましいところがあるみたいですね。マジック・ワードを言いましょか...プーレスト」

タマ「ひいーっ」

Y「失われた...」

タマ「ウワーッ」

Y「面白い、面白すぎる。椋岡マンガの主人公がいあんたは。にしてもなんですか先月号のネットタマの失態は。まったく、ぬわーにが“こうした手法はプーレストの小説『失われた道を求めて』を思い出させる”ですか。」

タマ「いや、10代のころ読んで井上ひさしの『吉里吉里人』の中にそういうタイトルのパロディ小説が出てきてね...そっちが先に記憶に刷り込まれてしまっついで間違えるんだよ、アヒルの赤ちゃんのようにな」

Y「弁解しないように。そういうのを“生兵法は下痢の元”っていうんです」

タマ「“ケガの元”だと思うが」

Y「(無視して)あのあと急遽訂正シールを印刷してもらったりDM封入アルバイトの方々に不眠不休でがんばってもらったりまったくどれだけの人に迷惑がかかったと思ってるんですか」

タマ「君だって編集長だろ、気づけよ。だいた

い不眠不休ってなんなんだよ」

「見苦しい、見苦しすぎるのう」

タマ&Y「ああっその声は、一年半ぶりに登場する推定107歳、カラスの...」

雁九郎♥カメラ目線になって)忘れちゃった読者の皆さんは2001年1&2月号の“ネットタマ”読んでね さてと...えへん、見苦しい、見苦しすぎるのう」

タマ「くりかえさなくていいから」

雁「くりかえしたくもなるわ愚か者めらが。自らの失敗を素直に認めてこそその前進であろうが。畑中良輔『音楽少年誕生物語』(音楽之友社)でも読めい」

Y「そういう前振りでしたか」

雁「邦楽に囲まれて育った幼年時代を経て、足踏みオルガンに熱中し、やがて関谷敏子のソプラノや ウィリアム・テル序曲 のSP盤によって洋楽への興味抑えがたく高まってゆく...将来に悩みつつ音楽家への道を進むと決めたはいいが、決意を語った教師に「君が上野(東京音楽学校、現・東京芸術大学)を受けるって? ははは、やめ給えやめ給え」と嘲笑される。しかしその笑い声によって少年畑中良輔打ちひしがれるかと思いきや、ああなんという健気さ、なんとという不撓不屈の意志、憤然と湧きおこる反抗と意地の力に突き動かされ、蛍雪の功積み重ね、ついにめでたく東京音楽学校の門をくぐるに至る、その波瀾万丈の1年間に血湧き肉踊る筆致と巧まざるヒューモアとでつづりし物語、これこそが『音楽少年誕生物語』なので有ります。ベベン(口三味線)。さて、受験のために上京した畑中少年、はじめにくぐりしは鶯鴨の...」

Y「誰か止めてくれー」

タマ「師匠、師匠、講談調も結構なんですけど、こういうところが我々にとってだいじなのでしょ」

雁九郎「ん? ああ(我に返って)...これからが

名調子なんだがな...。まあ要するに、この本は“失敗”も含めて、“出会うこと、決断することの勇氣”に満ちているのじゃ。人生って奴は、どんなに逃げようとしても、何かに出会うことから避けることはできない。それは人や事件かもしれないし、自らの心そのものかもしれない。そしてその度にどうするか、決断しなくてはならないのじゃ。たとえそのときの決断が失敗であっても、決断した自分を許し、失敗から何かを学びながら進む限り、それは最後には「失敗」でなくなるんだ。東京に出てきた畑中少年の失敗譚の数々、すごいぞ。初めての音楽レッスンで訪問した先生のお宅で、令嬢たちの前で石炭ストーブの詰まりを取り除こうとして部屋中灰だらけにしたり、憧れの握り寿司を食べようとして入った店が東京でも最高級の「おけい寿司」だったり...そんな恥ずかしいトラウマの数々を、臨場感豊かにつづって読者を楽しませる著者の度量の広さよ。それにそんな“事件”とは比べ物にならないくらい、受験勉強は苦しく情けないことばかりだったろう。しかしそれを乗り越え、“音楽少年”畑中良輔は誕生した。そして、この物語はまだ終わらない。雑誌『音楽の友』でまだまだ続いている。音楽青年、そして音楽家・畑中良輔の誕生を我々は見られる。そしてまた著者も80歳を超えて、まだまだ前進しつづけているのじゃ。わしもそうじゃ。今日はNHKの『フランス語会話』で仲根かすみちゃんを見るのじゃ! じゅてーむ!」

タマ「あんたのは“前進”じゃなくて“煩惱”です!」



宮本文昭オーボエ・リサイタル 水戸芸術館友の会主催の第33回鑑賞会として、MCO 50回定期でもソロ出演する宮本文昭のオーボエ・リサイタルを10月5日(土)に開催します。チケット発売日は7月17日(水)、友の会先行予約は7月13日(土)から受け付け開始です。料金は一般3,500円、友の会会員2,500円。



が、この6月、全日本空輸株式会社(ANA)のすべての国内線・国際線の機内放送プログラムで放送されることになりました。ビジネスで、ご旅行で、ANAの飛行機をご利用される際には、MDAでくつろぎのひとつをどうぞ!

究極のMCO研究本、現在編集中! 『理想の室内オーケストラとは』(仮題) 音楽之友社より6月後半発売予定。50回定期演奏会時にはコントロールポアンに並ぶ...はず?

ミト・デラルコと福田進一の演奏を、高度1万メートルの上空で! 4月11日の東京公演(紀尾井ホール、アリオン・アフタヌーン・コンサート)

information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029 - 231 - 8000
営業時間 / 9:30 - 18:00 (月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029 - 227 - 8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

【アートタワー通信】第1・第3週に1度、新しいばらき新聞に登場。

水戸室内管弦楽団大分公演

50回定期に先がけて6月25日に、小澤&MCOは大分県立総合文化センターの“グランシアタ(1954席)”で公演を行います。チケットは水戸同様、即日完売! ちなみに昨年9月には、ミト・デラルコが同センターの“音の泉ホール(704席)”で公演を行なっています。

この6月に待望の水戸室内管弦楽団の公演が「グランシアタ」でようやく実現することになりました。世界一流のアンサンブルを誇る水戸室内管弦楽団の演奏を、世界のマエストロ小澤征爾さんの指揮により大分て聴けるということは、この上ない喜びであり、地元では大反響を呼んでいます。(大分県文化振興財団:渡邊俊樹さん)

ドミトリー・パディアロフ、ミト・デラルコを退団

ミト・デラルコ(MDA)の第2ヴァイオリン、ドミトリー・パディアロフが、この第4回演奏会をもってMDAを脱退します。MDAプログラムに掲載された数々の楽器コラム、またWALK43号の楽器製作に関するエッセイなどでご存知の通り、パディアロフ氏は楽器製作と演奏を両立させる希有な音楽家として活躍してきました。しかし、今後は楽器製作により重点を置くために、MDAでの活動に終止符を打つことを熟慮の末決断しました。水戸芸術館とMDAメンバーは氏の意志を尊重し、これからのますますの活躍を心から祈りたいと思います。パディアロフ氏の活動の詳細は、氏のHP(<http://www.violadabraccio.com>)をどうぞ。ちなみに日本からの訪問客は3番目に多いそうです!

チケット・インフォメーション 6月1日(土)発売分

矢部昌子 ピアノ・リサイタル 9/8(日)14:00開演

料金(全席自由):¥2,000

ミト・デラルコ 第5回演奏会 10/12(土)18:30開演

料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

ミト・デラルコ第5回演奏会には、5月29日(水)より友の会の先行電話予約があります。

これからの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右・裏...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

水戸室内管弦楽団第49回定期演奏会

6/8(土)...中央x、左右・裏 ;6/9(日)...中央x、左右・裏

水戸室内管弦楽団第50回定期演奏会

6/26(水)...完売;6/27(木)...完売

パブロ・カルテット

7/6(土) ...自由席

グローブ座の音楽家たち シェイクスピアの音楽

7/12(金) ...1F・2F、3F正面、3F舞台後方、ペアチケット

加藤直子 ヴァイオリン・リサイタル

7/21(日) ...自由席

5/10(金)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問合せ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館6月のスケジュール

コンサートホールATM

水戸室内管弦楽団第49回定期演奏会

6/8(土)18:30開演 6/9(日)14:00開演

料金(全席指定):S席¥6,000 A席¥5,000 B席¥3,500

水戸室内管弦楽団第50回定期演奏会

6/26(水)19:00開演 6/27(木)19:00開演

料金(全席指定):S席¥15,000 A席¥13,000 B席¥9,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート

6/1(土)13:30/15:00 6/16(日)12:00/13:30

6/29(土)13:30/15:00

宴や夜市(泉町商店会)関連企画

6/28(金)18:00

入場無料 演奏は各回20分程度です。

エントランスで踊ってみる14 [Line/Space]

6/22(金)14:00/17:00 入場無料

ACM劇場

ストーンズ・イン・ヒズ・ポケット

6/18(火)19:00開演、6/19(水)19:00開演 料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥3,000

三曲各流演奏会

6/23(日)13:00開演 入場無料

現代美術センター

スクリーン・メモリーズ

4/13(土)~6/9(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600 中学生以下、65歳以上、心身障害者の方は無料

いけばな展

6/21(金)~6/23(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)最終日は9:30~17:00(入場は16:30まで) 入場無料

美術展覧会 第1期

6/30(日)~7/12(金)9:30~18:00(入場は17:30まで) 入場無料

茨城の主な6月の演奏会

常陽藝文センター TEL/029(231)6611 藝文友の会会員優待催事「リンクス リサイタル」 6/15(土)18:30開演

茨城県民文化センター TEL/029(241)1166 ジャズで奏でる“日本の詩情”虹のトランペット 大野俊三 ツアー2002 6/8(土)18:30開演

第28回茨城県新人演奏会 6/9(日)13:00開演

水戸市民会館 TEL/029(224)7521 茨城大学管弦楽団 第27回サマーコンサート 6/22(土)18:00開演(問)松本 TEL/090-8674-3851

ひたちなか市文化会館 TEL/029(275)1122

Bトレイン・ジャズ・オーケストラ10周年記念コンサート MALTA with B-Train Jazz Orchestra 6/2(日)18:00開演(問)Bトレイン・ジャズ・オーケストラ TEL/029(274)1026 茨城交響楽団創立40周年記念公演 6/30(日)14:00開演(問)茨城交響楽団 TEL/029(233)1448

日立シビックセンター TEL/0294(24)7711 エマニエル・アックス ピアノ・リサイタル 6/21(金)18:30開演

大宮町文化センター・ロゼホール TEL/0295(53)7200 サンタ・ジブシー・スーパー・アンサンブル 6/27(木)18:30開演

ギター文化館 TEL/0299(46)2457 アーメット・カネッチ ギターリサイタル 6/8(土)15:00開演

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴ] 2002年6月発行 第82号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):関根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵

松田善幸 矢沢孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...ACM劇場がグローブ座に?